

不格好でも飛びたい

かささー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

彼は飛び方を知らなかった。それでも彼は諦めない。不格好でも飛ぶために。

目次

第1話	きっかけ	1
第2話	仮入部	10
第3話	問題児たち	20
第4話	1年生	32

第1話 きっかけ

人生何が起こるかわからない。

こうしてバレーボールに触れているとついそんな言葉が頭に浮かぶ時がある。でも仕方ない。高校でバレー部に入るまでバレーはおろか、球技にすらまともに関わってこなかったのだから。そんな俺が今となっては暇さえあればバレーボールに触っている程にまでバレーに染まってしまっってしまうなんて、俺を含めて誰も考えもしなかったのだから。

因みに別の高校に行った中学の友人にバレーにハマった旨を伝えたところ、まず驚かれ、そして盛大に笑われた。イラつとしたので取り敢えずぶん投げておいた。

「はいこれ弁当」

「ありがとう」

手渡された弁当を受け取り、見送りに来てくれた母に告げる。朝早い故に音量は控えたが気合とやる気は十二分！ そんな俺の様子を感じ取ったのだろう。母は呆れた様に苦笑していた。見透かされた事に恥ずかしさはあるが、それだけでは今の俺は止め

られない。

玄関の扉を開けるとそこはまだ夜だった。いや、夜というのは語弊がある。夜の様に暗いのは西の空だけで、東の空はかなり明るくなってきている。それがどうした。

冷えた空気が刺さるように体温を下げようとしてくる。だがそれがどうした。

そんな程度じゃ俺は止められない。早くバレーがしたくて仕方がない。

「じゃあ行つてきますー！」

扉を閉めて駆け出す。目指すのは烏野高校。俺がバレーボールと出会った場所だ。



新学期や新生活のスタート。そんな春は出会いの季節だと人は言う。新しい友人だとか新しい趣味だとか、何に出会うかは人それぞれだろう。だけど俺はそんなこと考えたこともなかった。いや別に否定とかそう言うわけではなく、単にそこまで大げさなものじゃないだろうって言いたいだけだ。

『暖かい風が春の陽気を乗せて——』

なんてらしくない事を考えてみたが、どうやら潰せた時間はほんのわずかだったらしい。壇上で長々と語るお偉いさんは今もその勢いを維持したままだ。終わる気配が微塵も見えない。

というか真面目に聞いている奴が俺含めほぼいないっていうのはどうなのだろうか。寝ている奴が大半だ。まあこんな祝典の場で公に叱るなんてできないだろうから仕方ないのかもしれないが。

で、残りの人達は必死に笑いをこらえている。理由は明白だろう。今壇上で校長先生 の代理として祝辞を述べている教頭先生を見上げた。キツチリと整えられたスーツ、緊張など感じさせないハキハキとした言葉使い、そして妙にフサフサとして不釣り合いの髪。もうお分かりだろう。十中八九ツラを着けている。そして壊滅的に似合っていない。そのダサさにどうしても耐えられない。ああやばい、意識しだしたら……ブフツ。なんて吹き出しそうになるのを必死で耐えているうちに、ありがたいお言葉は締めに入った様だ。

『以上を持って祝辞とします。ようこそ鳥野高校へ』

そうして俺は——星野綾人は鳥野高校に入学した。



「こんにちはー、サッカー部はいかがですかー」

「野球部歓迎しますー！」

「絵に興味ありませんかー？」

高校初の帰りのホームルームも終わり、片付けを済ませて廊下に出た俺は気づけば上級生に囲まれていた。セリフから部活の勧誘というのはすぐに分かったが、側から見れば完全にリンチじゃないだろうか。場所が悪ければ通報ものだと思う。

「あ、あー俺まだ部活見て回りたいんで……」

当たり前障りのない返して取り敢えず先輩包囲網から脱出する。抜け出して気が付いたが、どうやら俺が廊下に出てきた新入生第一号だったらしい。きつとうちのクラスが一番早くにホームルームが終わって、その中で一番に廊下に出たから目立ったのだろう。そりゃ囲まれる訳だ。ロックオンするべき標的がーっしかないんだもの。

「さて、どこを見に行こうか」

手に持っていた冊子に目を落とす。これはさっきのホームルームで配られたばかりもので、学校のマップから部活など色々書かれている。下の隅っこに生徒会と書かれた

印が押されているのをみるに生徒会が作ってくれたものだろう。正直とても助かる。

部活紹介のページを開いた。何かしら部活には入りたいと思っではいるが、別にこだわりはない。それなりに興味持てて人間関係ズブズブじゃなければ極端な話どこだっていいからな。取り敢えず、片っ端から見に行こ

「ああああ！ どいてどいて〜!!」

「ぐえ!」

うとして後ろから強い衝撃、そして吹っ飛ばされた。ダメだよ後ろからタックルは。問題になったところあつたでしょ。まあ今回は運良く怪我もしてないし気にしないけど。

「(っ)っ(っ)めんなさい!!」

身体を起こすと目の前にオレンジが。いや違うオレンジ色の髪か。見事なまでの土下座で目の前がオレンジになっていたらしい。

「大丈夫だよ。特に怪我もないし」

「いやでも体育館に早く行きたくて思いっきり突っ込んだじゃったし……」

余程早く体育館に行きたかったのだろう。反動で物凄い後悔と反省の念が伝わってきた。ていうかこれ以上は変に注目されかねない。

「ホラこの通り俺は大丈夫だって。それより体育館はいいのか?」

「ああそうだ体育館！　ありがとう今度お詫びさせてくれ！」

じゃあなっ!!

そう言つてオレンジくんは去つていった。お詫びなんかいいんだが、まあ貰えるものは貰つておこう。それにしても体育館に一体何があるのか。何がオレンジくんをそうさせるのだろうか。

「バレー部、かあ」

冊子の体育館のページにはバレー部と書かれていた。

さて、取り敢えず体育館までやつてきた。特に見て回りたい場所もないわけで、さっきのこともあったからどうせなら体育館から見ようという訳だ。扉に手をかけて、
くざい。

「おじやましま……っ？」

何？　なんか空気が重い……。

黒いジャージに身を包んだ男の人がピシヤリと反対側の扉を閉めた。背筋が凍りそうなほど重い言葉とともに。

他人事でも気まずい所に遭遇してしまった。流石にこの中に飛び込む勇氣はない。また後で来よう。なんて考えていたら扉が動き出した。ホラーでもなんでもない。ただ横開きで半開きの扉に体重をかけて動かしてしまっただけ。あ、と思っても既に遅かった。大きな音を立てるとともに、先輩らの注意を集めた。

「あ、どうも……。こんにちは……………」
掠れた声しか出なかった。

「やー来てたなら声かけてくれよびつくりしたじゃないか」
「す、すみません」

結局雰囲気的にあの状況からおさらばする訳にもいかず、体育館に残った。

「あー見苦しい所見せちゃったな。俺は澤村大地、キャプテンだ」
「俺は菅原孝支。んで、こいつが田中龍之介。おいその顔ヤメロ威嚇ヤメロ」
「最初が肝心なんすよスガさん。先輩としての威厳をつ!？」

落ち着いた雰囲気の主将の澤村先輩。一見優しそうだが、さっきの背筋も凍る圧力を出していたのもこの人だろう。怒らせたらヤバイタイプの人だな。

んで隣の人が菅原先輩。この人もとても優しそう。澤村先輩の例があるからなんとも言えないけど。

そして菅原先輩に首根っこ掴まれたのが坊主の田中先輩。強烈な見た目だけで自分で先輩の威厳とか言ってるあたりただ空回ってるだけじゃないだろうか。

でも、いい雰囲気だと思う。この3人だけが部活の全員ではないだろうが、この部活なら楽しくやれるんじゃないだろうか。

自己紹介してくれた先輩にならって俺も自己紹介した。

「えと、星野綾人です。よろしくお願いします」

取り敢えず最低限。名前だけ答えた。新学期一発目の自己紹介でもないし、何を言えればいいのかが分からないから。聞かれたら答えるスタイルで乗り切ることにした。

「星野、だな。ここに来たってことはバレー部に用があるって事で良いのか?」

「もしかして入部希望か!？」

来るとは思っていたが、こんなにも早く来るとは。まあ変に気を使われて引き延ばされるよりはマシなんだけど。ただそれのはつきりした答えを持っていない。ちよつと困ったな……。

「あーえつと、なんて言えば良いのか……」

菅原先輩の笑顔が辛い。

いや、ここは変に取り繕わずに正直に話すべきだろう。

「あの俺」

「うんうん」

「バレーボール初心者なんですけど、入部できますか？」

第2話 仮入部

「初心者でも入部できますか？」

体育館から音が消えた。先輩たちが黙り込んでしまったから。俺が思いつく限りの懸念事項を尋ねた途端こうなってしまった。

静まり返った体育館で聞こえるのはグラウンドで声を上げる運動部の声とか風が吹く音だけ。唾を飲み込んだ音がやけに大きく聞こえる。きつと初心者というのは何処だろうと持て余してしまうのだろう。やはり無理があつたか。これ以上空気を悪くさせる前に立ち去ろうと決めた。

「あのごめんなさい。さっきのは忘れて」

「あーちがうそうじゃないんだ！」

さっきのは忘れてください、ご迷惑をおかけしました。そう謝って立ち去ろうとしたら菅原先輩に引き止められた。心なしか結構焦ってる。

「すまん星野。実はさっき来てた入部希望者が結構できる奴だな？ だから俺ら新入り

はみんな経験者だつて思い込んじゃつて」

なるほど？

「実際経験者のみ募集、なんて呼び込みはしてないからな。という訳で俺たちは星野がバレー初心者でも入部を歓迎する……んだが」

そこまで言つて、澤村先輩は言葉を濁した。もしかして初心者という問題以外にも、基準に引つかかつてしまつているのだろうか。

「困みになんだけど、星野はバレーボールどれくらいやったことある？ 例えば体育とかで」

「体育とかは……授業でちよつとだけ。それが毎年です。遊ぶときとかは殆どやったことありませんけど……」

菅原先輩からの問いに答える。バレーボールに全く触つたことはない、なんて訳ではないつて事を正直に伝えたけれど、果たしてこれの意味は一体。

「そんだけのバレー歴でお前はやつていけるのかア？」

「コラ田中！」

「バレーを頑張る覚悟があるのかア!!？」

田中先輩の怒鳴り声が鳴り響く。いや、ただ怒鳴っているだけじゃない。威嚇してくるその目はまるで、俺を試しているかのようだ。

澤村先輩が一步踏み出して言う。

「あー、まあ田中の言う通りだな。俺たちはただ楽しみたいからバレーしてる訳じゃない。試合で勝ちたくて練習してる。だから俺たちなりに厳しくやってるし、練習もそれなりにハードだと思う。初心者も歓迎って言葉に嘘はないけど、そこは曲げるつもりもない」

ああそうか、浅はかだった。初心者がやりたいってだけで入って、やっぱ辛いから辞めまーす。先輩たちはそれを危惧しているんだ。確かにそれは迷惑極まりない。俺がその立場ならキレそう。最悪怒鳴りつけるかもしれないな。

「だから取り敢えず仮入部はどうだろうって思ってたさ」

「そうだな。俺も何日か見学して雰囲気を見たりしてから入部するか決めるのでも遅くないって思うぞ」

菅原先輩も同意見なようで澤村先輩に続く。

さらに、もちろんバレー自体についても丁寧に入れてくれると補足してくれた。

初対面だけの俺に、この人達はここまで丁寧に接してくれている。そこに部員獲得のためという下心はほぼ無いのがわかる。真剣に俺のことを考えてくれているんだ。

ならば、俺も相応に答えなければならぬだろう。

「わかりました。では仮入部からって形でよろしくお願いします！ あと、そこまで考

えていただいております」

仮入部として参加することを澤村先輩と菅原先輩に伝える。そして俺は田中先輩に向き合った。

「ありがとうございます！」

「ん？ お、おう？」

「田中先輩のおかげで決心を固めることができました。仮入部ですが精一杯やらせていただきます。これからよろしくお願いします、先輩！」

田中先輩が覚悟を問いただしてくれなかったら、俺はなあなあまま参加していたかもしれない。結果論だとしても、ただのきっかけだとしても俺は田中先輩のおかげで大事なことに気づくことができた。感謝の言葉とともに頭を下げる。

しかしいくら待っても田中先輩から反応がない。不思議に思い顔を上げると、衝撃を受けたかのように先輩が仰け反っていた。

「あの、田中せんぱ」

「———そうだろうそうだろう！ なんとって俺は『先輩』だからな！ 後輩に正しい道を指し示してやるのが『先輩』なのだ！ はっはっは———！」

突然元気になった。しかもやたらと先輩を強調している。

「コイツ、ただ先輩って呼ばれて嬉しがってるだけだから。放つといいぞ」

呆れた様子の菅原先輩が耳打ちしてくれる。まあ不快になっていないなら良かった……かな？

因みに田中先輩が落ち着くまで、少なくとも5分はかかった。



取り敢えず今日のところは部活の見学をする事になった。着替えは持っていないが、制服のままでもやれる範囲でバレーボールについても体験させてもらえるらしい。とても楽しみたい。

「次、スパイク練習！ 声出してけよ！」

「あーっす!!」

主将の掛け声が体育館に響く。それに応える部員たちの声も大きく、部活全体にとっても活気があった。

「の」

体育以外でバレーボールなんて初めて見たが、なんて言うかこう、すごい迫力だ。

ボールをレシーブした時の音、スパイクを叩きつけた時の音、シューズが床に擦れる音。全てが新鮮で、なんて言うか心地よくて、格好良かった。

「——しの」

俺もいつか、あんな風になれるだろうか。

「星野！」

「は、はひ！ すみませんなんでしよう！」

気がついたら目の前に菅原先輩がいて、ビックリして変な声が出た。

「いや、いくら呼んでも反応なかったし、ボールとしてるように見えたからさ」

「ああすみません！」

「ああいや、怒ってるとかじゃないよ。ただ少し時間あるからバレーボール触ってみないかって思ってたさ」

「——ッ！ 是非。よろしくお願いします」

バレーボールを掲げて、やってみないかという菅原先輩の提案に俺は飛びついた。さつきまで見学させて貰っていたので、イメージは何となくできた。そしてそれ以上にモチベーションが最高潮だ。早くやってみたいと体が疼く。

先輩に続いてコートに入ると、練習中だった他の先輩方はドリンクやタオルを片手に隅の方で待機している事に気がついた。その様子を見るに多分今は休憩の時間なのだ

ろう。にも関わらず俺のために動いてくれている。ホント、この人達には頭が下がる一方だ。

「あの菅原先輩！」

「ん？」

「ありがとうございます！」

「？ ああ、良いって良いって！ それよりホラ」

そう言つて菅原先輩はバレーボールを手に構え、投げた。

「じゃあこれ終わったら対人パスね。俺がボールを上げるから、レシーブして返してくれ。オーバーとかアンダーかは自由にして良いし、万が一吹っ飛ばしても頼れる田中先輩が拾ってくれる」

「もちろんっすよ！ この田中先輩に任せておけば」

「そういう訳で、遠慮なく自由にやってくれ」

「わかりました！」

バレーボールでキャッチボールをしながら説明を受ける。因みにこのキャッチボールは肩を温めるアップなのだそう。そういえば今までの体育のバレーはバレーボールを使うっていう所に重きを置いていたから、それっぽい事をしただけでこういう本格的なことには一切触れられなかったな。

知らないことがいっぱいだ。

「じゃあいくぞー」

キヤッチボールで十分にアップした後、菅原先輩の合図とともにパスが来る。ふわつと上がったボールの着地点に両手を揃えた。見よう見まねのアンダーバンドパスで返す。

「おお！ 結構イイ感じじゃん！」

ボールは左右にブレながら、菅原先輩の横2，3メートルのあたりに打ち上がった。見るまでもなく下手くそなパスだがそれは初心者から見ればの話。バレー部の先輩からはお世辞か事実か分からないが、イイ感じの評価を頂いた。

「そら、もう一回！」

素早くフオローに回って貰った菅原先輩から、もう一度高くボールが上がる。今度は先輩を真似てオーバーで返した。ヒョロヒョロ玉がなんとか先輩に返った。

「全然上手いじゃん！ ホントに初心者か？」

「正真正銘、初心者、ですよ！ うげっ！」

何度か続いたパスだったが、会話で集中が途切れて俺が吹っ飛ばしてしまった。転がるボールを取ってくれたのは田中先輩だった。

「ホラよ。結構上手いじゃねえか」

「あ、ありがとうございます！」

まだまだ手探りで不恰好だけど、褒められて嬉しくないわけがない。ニヤつくの必死で抑えて、菅原先輩のところへ戻る。

「よっしゃ！ 次はアタック行ってみるべ！」

こつちも自由にやってくれて構わないらしいので、取り敢えずさっきの練習のを真似てやってみることにした。

「いくぞー」

菅原先輩の手からボールが上げられる。さつきよりも高く、余裕を持って打てそうなボールだ。丁寧なパスに痺れつつ落下地点で構える。

利き手を顔の辺りまで持ち上げる。そんで落ちてくるボールに合わせてスイング——！

「あつ、やべー！」

しようとしたのだが、上手くタイミングが合わせられなかった。なんとか打ったものの、芯を捉えることができなかつたボールはポヨンと打ち上がった後、何回かバウンドして止まる。

やっぱ難しい。でも、それ以上にバレーボールが楽しい。もっと練習して、俺も先輩たちみたいにボールを操れるようになりたい！

「あれ、どうかしましたか？」

気づけば体育館が静まり返っていた。あれ、つい数時間前に見た光景だ。もしかしてまた何か至らないところがあつたのか。

なんて思考がマイナスに働きだした時、菅原先輩が動きだした。けれどその顔は信じられないものを見た時のような表情で、こつちを指差す指もわなわなと震えていた。え、何。

「星野、今なんでそつちで……左腕で打つたんだ？」

なんで？ いや、なんでも何も。

「なんでって、俺が左利きだから……ですけど」

また静かになった。と思つた瞬間、先輩たちの雄叫びが響き渡つた。

「うおおおおー！ 左利きイイー！？」

え、なに？ 一体なにごとつ！

第3話 問題児たち

菅原先輩に上げてもらったパスを打ったら何故かバレー部の先輩方全員に驚かれた。イマイチ状況が飲み込めないのだが。

「オイ星野！ お前左利きってマジかっ!?!」

「いや、ここで嘘ついてどうするんですか!」

田中先輩が詰め寄ってくる。随分と食い気味だ。左利きっていうことのどこに食いついているのかわからない。バレーボールにおいて左利きってだけでそんなに特別なのだろうか。

「田中少し落ち着け」

「あ、ウイス」

田中先輩からの圧に困っていたら、澤村先輩が助けてくれた。田中先輩の首根っこを掴んで静かにさせる。途端に田中先輩は蛇に睨まれたカエルの如く静かになった。

え、そこまでする？ なんて思ったけど、周りの人は誰一人として気にしている様子がなかった。これが見慣れているのかもしれない。

やっぱり澤村先輩は怒らせてはいけないタイプだったらしい。肝に銘じておこう。

「すまんな星野」

「あ、いえ」

「さて、星野が左利きってことに驚いた訳なんだが」

「ずつと気になっていたところを澤村先輩が説明してくれた。」

「バレーボールにおいてサーブ、またはスパイクを打つ時は基本的にボールに回転がかかる。特に意識したりしない限りボールかかる回転はだいたい同じような感じになるんだ。でも、それは右手で打った場合だ」

「つまり、左手だと回転が変わるって事ですか？」

「そういう事。バレーボールはボールを持ってない球技だから、ほんの少し変わるだけでも大きなズレになってしまうんだ。加えて左利きの選手も少ないからその練習も難しい。そういうわけで左利きっていうのは貴重で戦力になり得るんだ」

まあポジションの適性とか他にも有利な点はあるけどな。

最後にそう付け加えてから、澤村先輩は練習の再開させた。

バレーボールにおいて左利きはそれだけで有利。今の話を纏めるとこういう事だろう。勿論それだけで勝てるようになるわけでも無いだろうし、何なら不利になる所だつてあるかもしれない。けどそれ以上に、バレーボール初心者俺でもバレー部に対して

何か貢献できるかもしれない。練習の見学に戻ってからも、この予想が頭から離れなかった。

再び練習を見学し始めてからどれくらい経っただろうか。先輩たちのブロックフロアの練習（そう教えてもらった）を覗いていたら、突然体育館の扉が開いた。

扉の音につられてそつちを見たら、白いジャージに身を包んだ女の人が立っていた。先生にしては若すぎるし、多分マネージャーだろう。

「潔子さん！ お疲れ様です。荷物お持ちします」

なんて考えていたら、田中先輩がそこへ突撃。マネージャーさんが担いでいたバッグを代わりに運ばせて下さいとお願いした。ていうか田中先輩早すぎない？ さっきまで練習してたじゃないですか。ブロックフロローちゃんど入れ！ って澤村先輩に怒られてた気がするんですけど。

「いい。自分で持つて行くから」

いや冷たい。なんていうか声色がとても冷たい。嫌っている……………はないにしても全く相手にしていないような。そんな風を感じさせる対応だ。

「潔子さん今日も美しいっす」

「……………」

「ガン無視興奮するっす！」

対応に全く動じずに褒めにかかった田中先輩をマネージャーさんは文字通りガン無視。流れが完璧すぎて怖いんですけど。そして無視されて喜びに震える田中先輩はさらに怖い。この人さつきまでカツコイイ系じゃなかった？

たまらない！ つとといった様子で自信を抱きしめる田中先輩を隠すように、菅原先輩が急いで扉を閉めた。最初に締め出された問題児くんでも居たのだろうか、オレンジ頭が見えた。つてあれ？ オレンジ頭つて俺にタックル喰らわせたオレンジくん？ 彼そんなワルだったの？ マジ？

「あの、君が仮入部の子？」

「は、はい。星野綾人です」

「そう。私はマネージャーの清水潔子。遅れてごめんなさい。早速だけどバレー部について説明するね」

「よろしく願います！」

「荷物置いてくるからちよつと待ってて」

体育館に入つて真つ直ぐにこちらに来たマネージャーさん——清水先輩にバレー部について教えてもらえる事になった。とてもありがたい。ていうか清水先輩美人すぎませんか？ なんて言うか色気がすご「ほおおいしいのおくうん？ チョットいいか

な？」

悪寒が走った。地を這うような低い声を出したのは田中先輩。顔が凄いいことになってる。

「ウチの潔子さんとは何仲良さげに話してるんですかあコラ。あんまチヨシ乗んじやねーぞコラあああ!!!」

「ヒイヒイヒイ！」

近い近い近い怖い怖いヒイヒイ!?

「コラコラやめろ田中。ただの業務連絡みたいなものだろ今のは」

菅原先輩が引き剥がしてくれたおかげで、どうにか平常心を取り戻すことができた。

本物のヤンキーでも逃げ出す。そんな確信が持てるほどさっきの田中先輩は怖かった。アレか、田中先輩は過激派のファンなのか。

「……………大丈夫なら、部活の説明を始めるよ」

そして何事も無かったような清水先輩。この人絶対メンタル強いよね。ガン無視対処とかさっきのスルーとか、結構難しいと思うんですけど……………。



そこから先は清水先輩に部活の説明をしてもらいながら、練習を見学した。そして今は後片付けも終わって自由時間である。

「さて、取り敢えず教えられる分は教えたかな。どうだった星野、烏野高校のバレー部は」
「とても楽しそうって思いました。けどそれ以上に本気で取り組む姿勢が見えました」

初心者の俺にも分かるほど、この人達は本気だった。ただ楽しいだけじゃなく、ただキツイだけじゃない。勝ちたいという目標を本気で実現させようとするその姿勢はとても惹かれるものがあった。

「そうか。そう言ってもらえるとこっちも嬉しいよ」

「よくわかってるじゃねえか星野。あいつらもコイツみたいにできたやつだったらな」

「そういえばあいつらどうしたかな。流石にもう帰ったか？」

「あいつらに限ってそれは無いんじゃないっすか？ それどころか『勝負して勝ったら入れてください！』とか言ってるじゃあないっすか？」

「あー、あり得るな。頭冷やしてちよこつと反省の色でも見せれば、それだけで良いんだけどな」

あいつら……？ 問題起こしたらしいオレンジくんのことか？ けどあいつら、か。

「あの澤村先輩。あいつらって……？」

「ああ、それはだな——」

『『キャプテン!!』』

突然、澤村先輩を呼ぶ2人分の大きな声が飛んできた。ビックリして声の方向に視線をやると、そこには清水先輩が入ってきた外へと繋がる扉が。どうやら声の主はこの向こう側にいるらしい。先輩が開けた扉のその先には、案の定1年生ジャージを着たオレンジくんともう1人が居た。

「勝負して下さい！ 俺たちと先輩たちとで！」

「……せーの、ちゃんと協力して戦えるって証明します!!」

堂々と、声高らかに彼らは宣言した。小さくせーのと呟いたのは俺はスルーするべきだろう。この件については部外者だし。

「なははっ！ マジかコイツら！」

「せーのって聞こえたんだけど」

「でも俺、こういう奴ら嫌いじゃないっすよ」

「負けたら？ 負けたらどうする」

「うえっ!？」

「どんな罰も受けます」

田中先輩と菅原先輩が会話する傍らで、澤村先輩が問いかける。それに答えたのは黒髪の彼だった。

どんな罰も受ける。一見覚悟が決まっているように見えるが、俺にはどうも違うように見えてならなかった。

「ふうん?」

澤村先輩も同じかどうかはわからないが、何か感じ取ったらしい。怪訝そうな声そのままで言葉を繋げた。

「丁度いいや。お前らの他に2人、入部予定の1年がいるんだ。そいつらと3対3で試合やってみらおうか」

「3対3ですか? 俺とコイツと、あと1人は」

澤村先輩、その入部予定の1年に俺は入っていませんよね? 俺まだ仮入部ですし。おいオレンジくん俺を見るな。

「田中当日、日向たちの方に入ってくれ」

「俺っすか!?! それこそ星野でいいじゃないっすか」

「星野はまだ仮入部だろう」

「うう」

あれ？ 俺今田中先輩に売られた？ もしかしてきつきの根に持ってます？

「お前コイツらのこと嫌いじゃないって言っていたじゃないか」

「関わるのは嫌っすよ」

「そうかー、問題児たちを牛耳れるのは田中くらいだと思ったんだけどなー仕方ない」

「……………フフフツ」

あ、喰いついた。

「しようがねえな！ 俺がやってやるよ、ホラ嬉しいか？」

どうやら澤村先輩は田中先輩のやる気を的確に引き出したようだ。手のひらを返すかの如く急にやる気を出した田中先輩はその申し出を快く引き受けた。

「で、お前らが負けた時だけど、少なくとも俺ら3年がいる間は影山にセッターはやらせない」

「……………は？」

「それだけ、ですか？」

先輩が提示したペナルティに黒髪の彼が反応した。どうやら彼が影山くんのような。と言うことはその隣にいるオレンジくんが日向くんか。

「個人技で勝負挑んで負ける自己中なやつがセッターじゃチームが勝てないからな。ど

うした、別に入部を認めないって言っているわけじゃない。お前なら他のポジションでも余裕だろうに」

「俺はセッターです!!」

影山くんはペナルティ納得いかなかったようで声を荒げた。話を聞くに負けても入部は認めるがセッターというポジションは認めないということらしい。不満剥き出しに影山くんは先輩を睨みつける。

「勝てばいいだろ。自分一人の力で勝てると思ったから来たんだろ?」

「え!? 俺も、俺もいますよ!」

「お前ら、この田中先輩がヒヤア!」

「ゲームは土曜の午前。いいな!」

格好良く決めようとした田中先輩を引き込み、澤村先輩に合わせて扉を閉めた菅原先輩。流れるような完璧な動きだった。

「ごめんな星野変なところ見せて。あいつらも入部希望の1年なんだけど……………」

「それは大丈夫ですけど。何かやらかしたんですか?」

「ああうん、チョット色々あってな」

蚊帳の外だったけど、そもそも部外者だったからそこは気にしていない。けど菅原先輩が言葉を濁すほどのやらかし。一体何をしでかしたのだろうか。

「ていうか大地なんかあいつらにきつくね？」

「確かにいつもより厳しいっすね」

「なんか特別な理由でもあんの？」

長年一緒にやってきた菅原先輩達にも澤村先輩に違和感を感じたようだ。なんていうかちよつと強引な感じだったのが俺にも分かったし、結構らしくない事を先輩はしているようだった。

「お前らも去年のあいつらの試合見ただろ？」

「去年？」

「ああ、俺ら去年のあいつらの試合見たんだ」

「なるほど」

なるほど、先輩たちは一方的だけど元々知っていたのか。

「影山は中学生としてはずば抜けた実力を持っていたはずなのに、イマイチ結果は残せていない。さらにあの個人主義なままじゃまた中学のリピートだ。チームの足を引っ張りかねない。けど今は、今あいつのチームには日向がいる」

「日向？ まあ運動神経の塊みたいなやつっすけど」

「そんなにすごいんですか？」

「おう。あれはびつくりしたなあ」

中学生の時点の試合で先輩たちにここまで言わせるなんて、一体どんな感じだったんだろうか。ちよつと気になるな。

「技術はまだただけど、類い稀なスピードと反射神経、そして凄いバネを持っていた。けどあの試合では良いセッターに恵まれなかった。そして影山は自分の早いトスを打てるスパイカーを求めている」

互いのニーズががちりと噛み合っているわけか。

「あいつら単独だと不完全だろう。でも」

澤村先輩は一旦そこで言葉を区切り、笑みを浮かべた。期待が、ワクワクが抑えられないといった様子で。

「コンビネーションが使えたら、烏野は爆発的に進化する。堕ちた烏野が再び大空を舞える。そうは思わないか？」

カラスが凜々しく、大空へ飛び立つ。そんな幻が見えた気がした。

澤村先輩がそこまで言い切る根拠が、あの2人のバレーにはある。そして、あの2人をきっかけに烏野はもつと強くなれると先輩は言った。そこまで言わせる2人のバレーを見てみたい。けどそれ以外にそこまで言われる彼らが羨ましいと、自分もあんなりたいと、少しだけ思った。

第4話 1年生

記念すべき高校生活2日目。今日は授業は行わずにガイドランス的な行事だけだから昼過ぎには放課になるらしい。つまり部活の時間がすぐに来るということ。

バレーの興奮が冷めやらぬうちにもっとボールに触りたいものだ。

「オラ足止めんなー！」

「ぐぬぬ……………」

校門をくぐり少し歩いたところにある空きスペースから声が聞こえてきた。部活の朝練にしては場所的に少しおかしい。狭いし。

声の主に目を向けるとそこには制服を着た二人組がいた。バレーボールを持って。

目が合う。

「あ」

「……………ああ？」

「ああー！！」

見たことがある。手前の彼は目立つオレンジ頭だ。昨日突撃されて、その後体育館か

ら締め出されていた気がする。ということは奥にいる黒髪の彼もその時一緒に締め出されていたやつだろう。ある意味特徴的な二人組だ、見間違いではないだろう。

「お前昨日体育館にいたな！ バレーやんのか!？」

「うわ、ちよつと落ち着いて!」

互いが互いを認識した次の瞬間、オレンジくんが詰め寄ってきた。それはもうぶつかりそうになるくらいまで寄ってくるもんだからびつくりするつてもものだ。

「昨日バレー部に仮入部したんだ。名前は星野綾人、よろしく!」

「そうだったのか! あ、俺日向翔陽!」

質問に答えてからまだ自己紹介をしていなかった事を思い出した。その流れでオレンジくん——日向くんと自己紹介を交わす。ちなみに奥にいる黒髪くんはやはり昨日体育館の外にいた影山くんらしい。日向くんがアレ影山な、なんて言った時は少々揉めていたが、取り敢えずこれで2人と自己紹介をすることができた。

「そう言えば日向くんたちは「日向でいいよ」……日向たちはどうしてここでバレーやってんの?」

正式に自己紹介が済んだのでずっと気になってた事を聞いた。土曜に試合することは昨日聞いていたけど、朝練には出ないのだろうか。

「——になったから……」

「え？」

「だから……っ、体育館出禁になったから」

悔しそうな顔をしながら、日向はそう呟いた。

それを聞いてハツとする。確かに昨日日向たちは一步も体育館に入っていない。少なくとも俺があそこに行つてから一度も。決闘宣言の時も澤村先輩は扉の前でずっと構えていた。単に外にいた日向たちと話をするための位置取りだと思つていたけど、もしかしたらそういう意味もあつたのかもしれない。現に扉を閉めるまで、先輩は一步もそこを動かなかった。

出禁になった理由は………聞かない方がいいかな？

「こいつのクソレシーブのせいで教頭のズラ吹っ飛ばしたせいでな」

「ぶふっ！」

「な………！ あれはお前が——」

「何が前とは違うだ。期待して損したクソが」

「昨日も聞いたそれ！ 一々一言多いんだよ！ お前こそチームメイトの自覚できたのか？」

「だから一緒に戦えばチームっぽく見えるつただろうが。そのためにお前のクソレシーブをなんとかしようとしてんだ」

「またクソレシーブって言いやがったなあ！」

日向と影山くんが言い合いを始めてしまったけど、今の俺には止める余裕なんて無かった。聞くつもりはなかった理由が思ってた以上にヤバかったから。

教頭のズラ吹っ飛ばしたせいで

パワーワードが過ぎる。あのバレバレな秘密のボールが解放される状況。大変失礼な自覚はあるが、他人事だからこそ吹いてしまった。想像するだけでヤバすぎる。

「ぐぬぬ……………、つとそう言えば星野はバレーボール経験者か？」

ひとしきり言い合ってから、唐突に日向は俺に話題を振ってきた。気がついていないのかスルーしているのかは知らないが、あ、逃げたなコイツって顔をする影山に日向は一切触れなかった。

「いや、俺は初心者だよ。だから昨日は仮入部だけだったんだ」

「そうなのか。影山ほどじゃないけど背が高かったからってつきりバレーやってたのかと思った」

「ふーん。ちなみに影山くん身長は？」

「180。あと呼び捨てでいい」

「あつそう？」

「うぐ…………、じゃあ星野は？」

「俺？ 俺は178.3cm」

「なんだと!? ぐぬぬ……………」

180cmの舞台は男のロマンだ。それにすでに乗っているとはなんて羨ましい。成長期のせいか去年だけで一気に背が伸びたから、多分届くと思うんだけど、そろそろ成長期終わってしまいそうでちよつと怖い。

キーンコーンコーンコーン

「ん?」

そんな時突然ベルのような音が鳴り響いた。いや、これが何かなんてわかりきっている。学校のチャイムだ。では今の時間は? 今のチャイムは何の合図だ。

時間を確認する。時計の針は朝のホームルームの5分前を示していた。つまり、今のチャイムは……………!

「やべっ遅刻する!」

今のチャイムは予鈴! つまりあと5分で遅刻となってしまう。けどここから教室まで普通に歩いたら5分はかかるかもしれない。一年の教室は校舎の奥の方にあるから。

「走るぞ日向、影山！」

「うわっやべえ！ 待ってくれよ星野〜！」

「な!?! フライイングだあテメエら！」



「朝からそんな事があったのかー」

「ええもう大変でした」

今日も今日とて仮入部の俺は部活に行く途中の菅原先輩とばったり会ったのでそのまま一緒に体育館を目指していた。道中日向たちと一緒に遅刻しそうになったことを話しながら。

「にしても凄いなーあいつら」

「? どうしてですか？」

「いやな? あいつら体育館っていうか部活動に出禁だから朝練前に秘密特訓してたんだよ。俺と田中も付き合った。んで、それやって更に特訓って頑張ってるなーって思っ

「さ」

「た、確かにそれは凄いですね」

「ホントにバレーが好きなんだろうな、最早バレー馬鹿って感じだ」

バレー馬鹿。確かにしつくりくる表現だろう。あそこまでバレーに打ち込めるのは馬鹿にしか出来ない。でも見方を変えれば、それほどバレーに打ち込める熱意があるということ。果たして俺に、それだけの熱意があるだろうか。

「大丈夫だべ」

そんな時、菅原先輩が呟いた。

「あいつら程の熱意が無くても。やる気があるなら、バレーが好きならやっていけるべ」
上っ面の慰めなんかじゃない。今までそうして続けてきた先輩の言葉には実体験による意味が、重みがあった。

「なるほど、ありがとうございます」

好きだからこそ続けられる。じゃあ……………あの頃の俺には好きなんて感情は残っていないかったのだろうか。

「うーっす」

「う、ういっす」

菅原先輩に習つて挨拶する。いきなりこんな挨拶で大丈夫かとも思ったが、同じように返事を返してくれたのを見るに多分問題なかったのだろう。失礼が無かつたようであらう。少しホツとした。

「おお来たな。スガ、今日この後新生入生が2人来るから頭入れといてくれ」

「ああ、昨日に入部届もらつたつていう？」

「そういう事だ。取り敢えずネットとか準備しながら待つぞ」

「ラジャー」

そう言つて菅原先輩は準備のために体育倉庫へと向かつた。隅の方で待つていいと言われたけど、シロウトと言えども何もせずにいるのは申し訳ないので何かできることはないかと手伝いを申し出る。幸い快く申し出を受けてくれた菅原先輩は嫌な顔をせず説明しながら準備を手伝わせてくれた。

そして作業がひと段落ついた時、合流した田中先輩と一緒に先輩は大きな欠伸を漏らした。

「眠そうだなお前ら」

澤村先輩のただの疑問。しかし先輩2人はそうは受け取れなかつたようで、ギクリと肩を揺らした。

「そ、そうかな？ 勉強のしすぎかも？」

「お、俺も勉強をチョット」

「お前に限ってそれは無いっ」

「ええっ!？」

「失礼します」

菅原先輩たちが必死で言い訳? をしていたその時、綺麗な制服に身を包んだ二人組が入ってきた。メガネをかけた長身のやつとそばかすが特徴的な男子だ。俺と同じ1年生だろうか。ていうかメガネかけた方背高いな。

「おお来たか」

澤村先輩が入ってきた二人組を出迎える。先輩と2人の話を聞くに、どうやら彼らはさつき先輩たちが話していた入部予定の1年生らしい。昨日の日向くんらとは別口。ということとは彼らの試合相手はこの2人になるらしい。そして案の定というか、2人もバレーボールの経験者のようで。……この調子だとバレー部で未経験者は俺1人になりそうだ。その事実には少しだけ不安になる。

「キミも入部予定の1年生?」

未経験な状態でこれからやっていけるか、なんて考えていたら件の2人が近くまで来

ていた。無視するのもよろしく無いので、返事をしよう。取り敢えず自己紹介だ。

「いいや、まだ仮入部だよ。俺は1年5組の星野綾人」

「ふーん。僕は月島蛍、1年4組」

「俺は山口忠。ツッキーと同じクラスなんだ」

「で？　なんで仮入部？」

自己紹介に応じてくれたお陰で顔と名前を一致させることができた。長身でメガネをかけているのが月島くんです。そばかすの彼が山口くん。どっちも俺より背が高い。俺だって平均身長よりそれなりに高い方なだけだ……。

しかし仮入部ということに月島くんが気になるのも当然だろう。経験者の彼からすればわざわざ仮入部を挟む理由に検討がつかなくても仕方がない。口にはしなかったが後ろにいる山口くんも気にはなっている様子だ。

しかし俺にはどうしてか、疑問の言葉を投げかけた当の本人に、言葉とは裏腹にそれに興味があるようには見えなかった。

「俺バレー未経験だからさ。先輩らの好意で取り敢えず仮入部から、つてなっただよ」
「へえー」

答えたけど、月島くんからの返事は思った通り興味がなさそうな感じだった。

いや、もしかしたらこんな感じが月島くんのデフォなのかかもしれない。言われたとこ

ろでへえー、な程度の疑問だろうし。彼はクールとかクレバーとかそんな感じが似合うだろうか。

「にしてもよくバレーボールなんて選んだよね。初心者のキミには難しいデシヨ」

笑いながら問いかけてきた月島くんだが、その笑みは笑顔ではなく揶揄이었다。前言撤回。君性格悪いな？

「まあね、すごく苦労してるよ。けどすごく楽しいよ」

下手なのはどうしようもない事実だけど、バレーが楽しいっていうのも嘘偽りない本音だ。俺も先輩たちのようになれたらって思う。

「……………ふーん、いいんじゃない？ 楽しくやれるなら。たかが部活なんだしね」

そう言い残して、月島くんと山口くんは去っていった。

たかが部活、そういう考え方も間違つては居ないと思う。3年だけのものだし、一生を掛けるわけでも無いのだから。けどあの時の月島くんにはそれだけじゃない何かあったような気がした。会ってまだ間もないし流石に気の所為だと思っけども。

「集合！」

澤村先輩の号令がかかった。よく分かっていない憶測を頭から追い出し、整列する。前の列に先輩方、その後ろに俺と月島くんたち。今日は出来る範囲で部活の練習に混ぜてもらえるから、今からとても楽しみだ。

一生懸命にやろう。今朝あつた日向たちみたいな熱情は無いかもしれないけれど、今あるやる気と楽しさは負けるつもりはない。

「——以上だ。それじゃあ練習始めるぞ！」

「「はい!!」」